

- Session 7: New and Developing Methods
 Session 8: Peptide Biochemistry and Protein-Peptide Interactions
 Session 9: Protein Folding: Mechanisms
 Session 10: Protein Networks
 Session 11: Protein-Nucleic Acid Interactions
 Session 12: Protein Structure Prediction
 Session 13: Protein Structure/Function Studies
 Session 14: Protein-Protein and Protein-Ligand Interactions

筆者は、「Enzyme Kinetics and Mechanisms」のセッションで「Expression and Characterization of a Sigma-class Glutathione S-Transferase of the Fall Webworm, *Hyphantria cunea*」と題して発表を行った。農業害虫アメリカシロヒトリ (*H. cunea*) 由来の解毒酵素（グルタチオン転移酵素）の酵素化学的性質ならびに農薬解毒機構について一時間ほど発表説明と質疑応答を行った (Yamamoto *et al.*, *Biosci. Biotechnol. Biochem.*, 2007)。筆者のポスターを訪れた方は、皆さん熱心に聞いてくださり、有用な質問や感想をいただいた（写真3）。24日夕方にはレセプションが開催され、多くの外国人研究者と交流を持つことができた。その後のバンケットでは、食事をとりながら National Institute of General Medical Science のディレクターである Berg 博士のスピーチがあった。また現在研究を進めているプロテオーム研究についても関係研究者と活

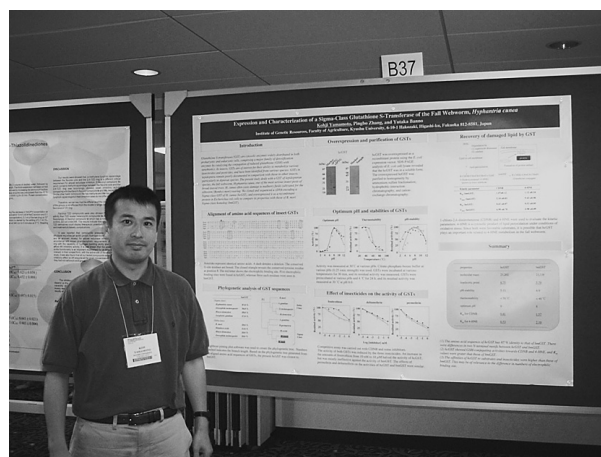


写真3 筆者ポスター

発なディスカッションを行い、情報を得ることができたのは大きな収穫であった。

上述のように同学会は、同じ分野に属する多くの研究者の交流の場として有意義な場所である。次回第22回大会はサンディエゴ市での開催が決定しており、筆者もまた参加したいと考えている。最後に、本国際学会参加にあたり、多大なる補助をいただいた農芸化学研究奨励会に心より感謝するとともに、今後多くの研究者の海外活動の補助となる貴財団助成を続けていただきますようお願い申し上げます。

第14回欧州糖質シンポジウムに参加して

鳥取大学地域学部 田村純一

第14回欧州糖質シンポジウム (14th European Carbohydrate Symposium) が2007年9月2日から7日までの6日間、ドイツ北部のハンザ都市リューベックで開催され、筆者は発表の機会を得た。リューベックの旧市街は運河に囲まれており、それほど広くはない。中央駅から旧市街へは歩いて行ける。途中、有名なホルステン門が、傾きながら道路を塞ぐように立っている（写真1）。旧市街のれんが造りの古い建物は中世の雰囲気を残し、狭い路地を通るとタイムスリップしたような感じがする。シンポジウムは、これとは対照的に近代的な Musik- und Kongresshalle で開催された（写真2）。

残暑が厳しい8月末の日本とは大違いで、こちらはすでに秋だった。朝は息が白くなり、ホテルには暖房も入っていた。日中もそれほど暖かくならず、滞在中長袖は欠かせ

なかった。

【シンポジウムの経緯】

欧州糖質シンポジウムは、欧州各国持ち回りで隔年開催され、今回で14回目になる。本シンポジウムの開催地は



写真1 ホルステン門（手前は筆者）



写真2 会場入口



写真3 ポスター発表風景

欧州だが、実質的には世界各国から参加者がある。欧州の糖質系学会に所属していることは求められないので、欧州外の参加者にも同等に発表の機会があり、世界的なシンポジウムの位置づけになっている。もともと欧州では糖合成化学が盛んだったことと、同年に開催される国際複合糖質シンポジウム (International Symposium on Glycoconjugates: 今回は7月にオーストラリアで開催) では生化学系が中心だったことから、参加者の棲み分けができていた。しかし近年は、(ウエイトの差はあるが) どちらのシンポジウムでも化学と生化学が扱われるようになり、しばしば両者が夏に開催されることから、参加の選択を迷う人も少なくない。筆者はディスカッションのできそうなこちらを選んだ。本シンポジウムで扱う研究対象は、Carbohydrates・Polysaccharides・Glycoconjugatesであり、1) Chemical and Enzymatic Synthesis, 2) Structural Analysis & Biological Function, 3) Glycobiology, 4) Carbohydrates in Industry の4つの領域について発表と討論が行われた。今回の参加者は約800名で、口頭発表は約170件、ポスター発表は約300件であった。会期を通じ

てすべてのポスターは貼りだされたままにされ、いつでも見ることができるようになっていた (写真3)。これまでの本シンポジウムの経緯から、化学系領域が最も発表件数が多く、発表全体の半分以上を占めていた。糖質系のシンポジウムは世界のどこで開催しても日本人研究者の参加が目立つ。日本で糖質研究が盛んであることの裏づけとなっている。

【講演発表から】

今回のシンポジウムでの講演やポスター発表には、筆者が知的興奮を覚えるものが数多くあったが、中でも「参加してよかった」と感じさせる講演があったので紹介させていただく。

Verez Bencomo 教授 (Cuba) は、“A Glycoconjugate Vaccine against *Haemophilus Influenzae* type b using a Synthetic Antigen” と題して、最終日に熱のこもった講演を行った。Bencomo 教授らのグループは、合成糖鎖を抗原とするインフルエンザワクチンを開発した。そのワクチンは実際にキューバで2004年から使用されている。何かを作っておしまいという糖鎖の合成研究が多い中で、実用化を念頭に置いた研究であることと、実際の臨床試験で医療的効果が顕著に現れたことは注目に値する。しかし、この講演の価値は、その研究結果だけでなく、Bencomo 教授らのグループが、人の命を救いたいという一貫した姿勢で研究に邁進した姿が聴衆に伝わったことにある。私自身も大いに感動した。講演終了後、会場から惜しめない拍手が送られた。これだけ長い間拍手が鳴り止まなかった学会講演は初めてであった。研究の動機の重さというものを改めて考えさせられた。

ヨーロッパに来てほっとさせてくれるものの一つに、教会のパイプオルガンの音色がある。シンポジウムの2日目にマリエン教会 (Marienkirche) (写真4) でオルガンコン



写真4 オルガンコンサートのあった Marienkirche

サートが開催された。体にしみ込むような素晴らしい音色に、たいへん癒された。次回(15回)の本シンポジウムは、2009年7月にオーストリアのウィーンで開催される。いい研究結果を出して、またこのシンポジウムに参加してみ

たい。

最後になりましたが、本シンポジウム参加の機会を与えていただき、ご援助いただきました(財)農芸化学研究奨励会に厚く御礼申し上げます。

第10回アジア栄養学会議に出席して

鹿児島大学農学部獣医学科 叶内宏明

第10回アジア栄養学会議が2007年9月9日から13日までの5日間、台湾・台北市の台北国際会議場(TICC)で開催された。TICCは2007年現在、世界で最も高いビルである台北101に隣接していた。本会議は1971年にインド・Hyderabadにおいて第1回が催され、現在では4年に一度の開催となっている。同様の会議では国際栄養学会議があるがこちらも4年おきの開催であり、アジア栄養学会議はその狭間に開催されている。本会の目的は栄養科学に関連する人々の結束の助け、アジアの人々の健康に寄与するアイデア交換の機会を提供することにある。近年、アジアの栄養学者は貧困に伴う成長期の栄養問題と生活習慣病という両極の問題に直面している。困難な問題であるが未来のために改善の努力が必要であり、アジア以外の研究者の参加も呼びかけられていた。

会議初日はwelcome receptionがTICC内で開催された。ノンアルコールの会であったが閉会まで多くの参加者が残っており活気にあふれていた。会議2日目から5日目までの会期中に5件のPlenary Lecture、21件のSymposia、6件のWorkshopで合計147演題が登録されていた。ポスターは493演題が登録されていた。その内容を大きく区分するとエネルギー代謝、ビタミンおよびミネラ



写真2

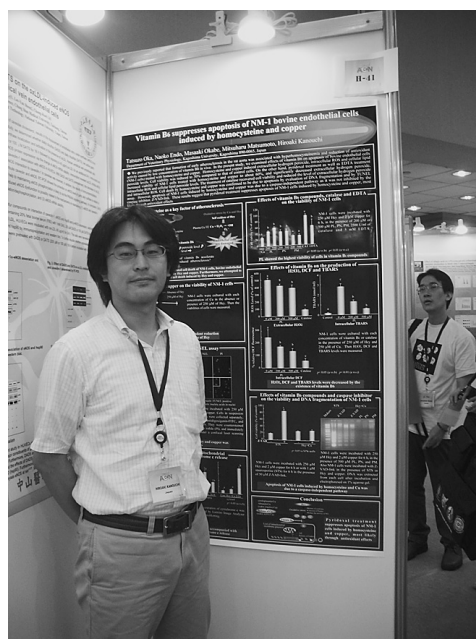


写真3



写真1

ル、栄養疫学、栄養教育、食品性生理活性物質および機能性食品、生活習慣病、肥満と体重コントロール、栄養と運動、栄養と免疫、臨床栄養、栄養と食品加工となっていた。大半の演題は食品性生理活性物質および機能性食品であった。立ち見が出ていたシンポジウムの一つである「New Frontier of Amino Acid Science」では、幼児期のアミノ酸要求量が現在の基準とされる量では不充分である可能性